

生物多様性なごや戦略

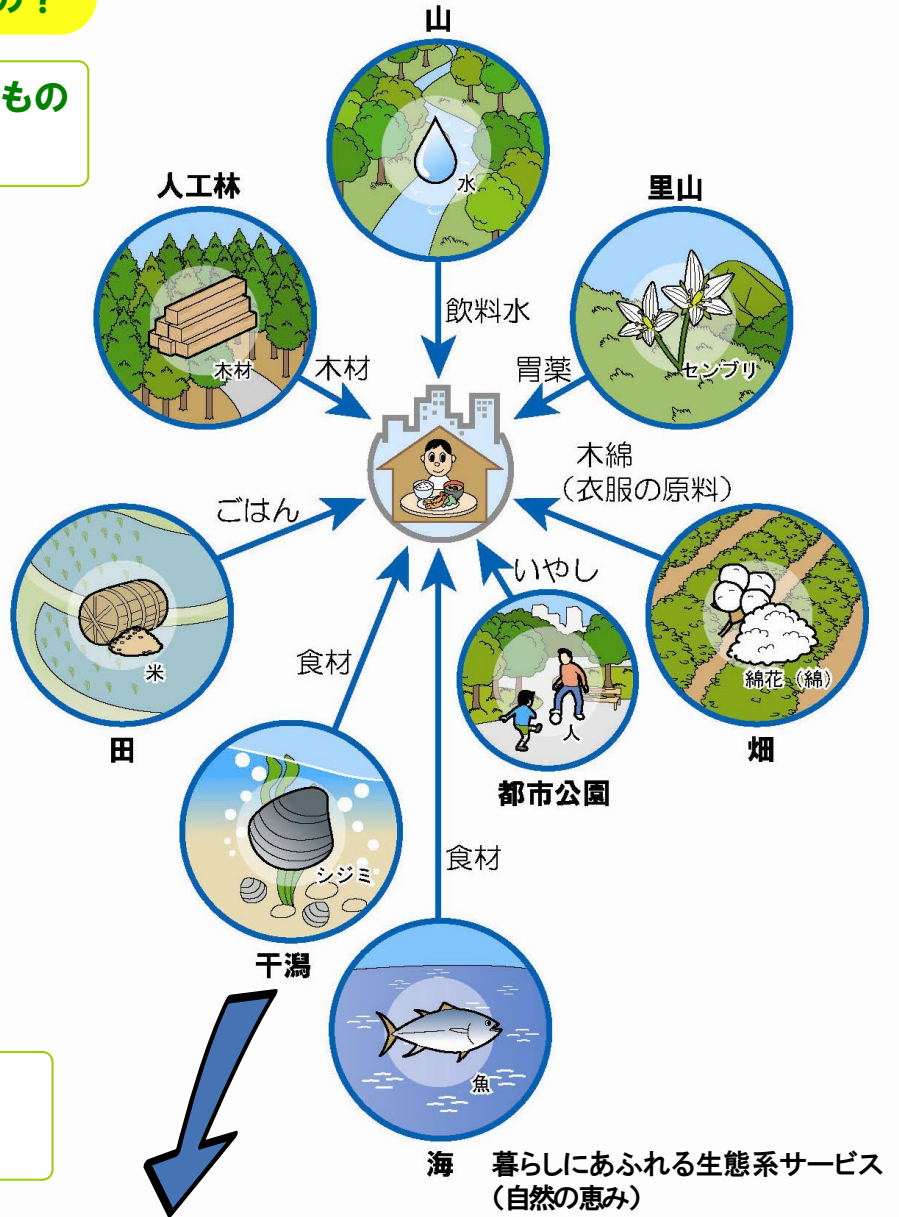
(H21.12.22 中間案抜粋)

1. 生物多様なごや戦略で伝えたいこと

なぜ、生物多様性を保全するの？

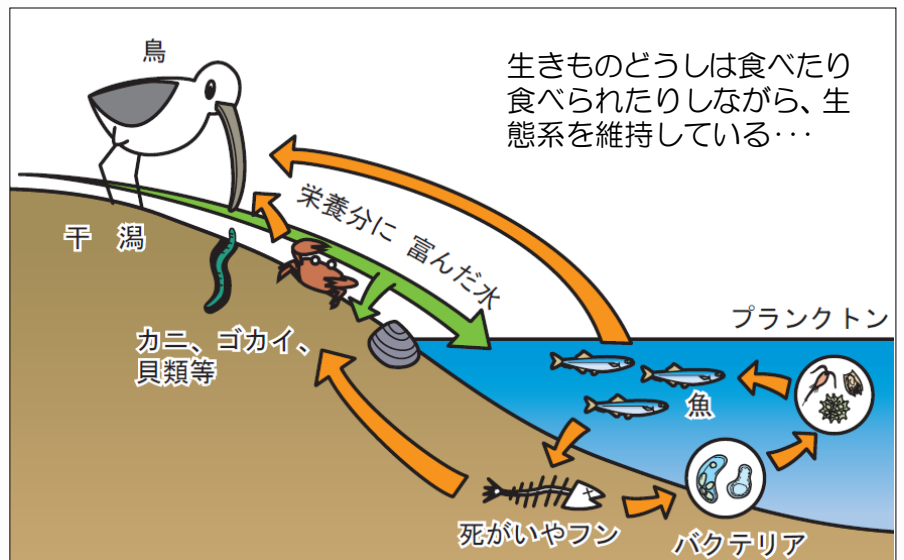
わたしたちは、さまざまな生きものに支えられています

- ・わたしたちは、生きるために、食べものだけではなく衣服や住まいの材料、薬の原料など、多くのものを自然の中からもらっています。
- ・たとえば、山に降った雨は川によって運ばれ、わたしたちが毎日利用する水になります。
- ・また、自然とのふれあいの場や、自然の中で感じるいやしの効果など、自然そのものからもさまざまな形で支えられています。



生きものは、互いにつながりをもって生きています

- ・すべての生きものは、互いにつながりや役割をもって生きています。
- ・つながりが切れてしまうと、他の生きものが困ってしまうだけでなく、わたしたちの食べものがとれなくなるなど、安心した暮らしがなくなってしまうかもしれません。



干潟の生きものつながり

大都市なごやにも関係があるの？

なごやは、世界中の生物多様性に依存しています

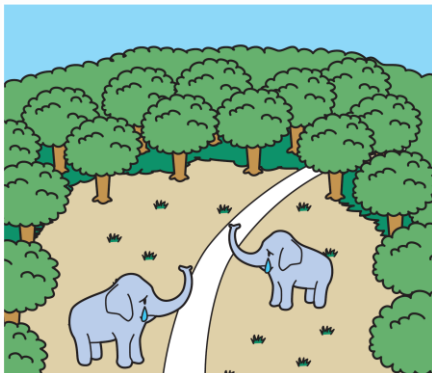
- ・現在、わたしたちは、外国から輸入される食品やエネルギー、つまり世界の生きものに多くを依存しています。
- ・毎日の食事や衣服、家具など身の回りにあるものはどこから来ているのでしょうか。



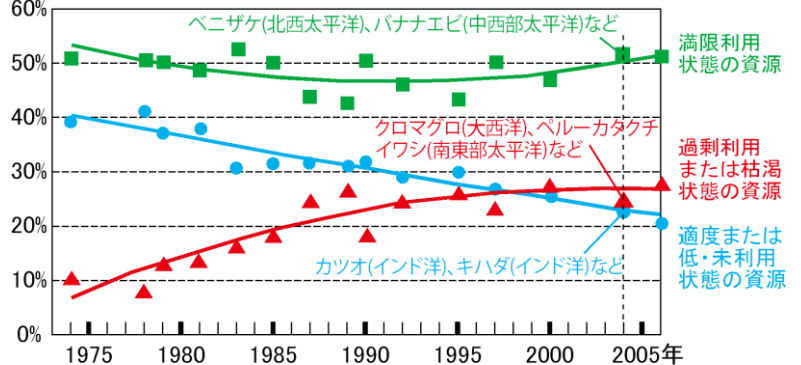
わたしたちは、世界中の生物多様性に影響を与えています

- ・日本は木材の76%を海外から輸入していますが（平成20年）、生産国のなかには、森林伐採や野生生物の生息地減少などが問題になっているところもあります。
- ・世界の海面漁業（養殖を除く）の生産量は頭打ちの状態にあり、日本を始め消費国には水産資源の持続的利用に向けた管理の強化が求められています。

野生生物の生息地破壊



水産資源状況の推移



わたしたちができること

身近な自然を保全・再生しましょう

- まずは、あしもとの“わずかに残るなごやの自然”にしっかり目を向け、大切にしましょう。
- 身近な自然を大切にすることが、世界の生態系を保全することにつながります。

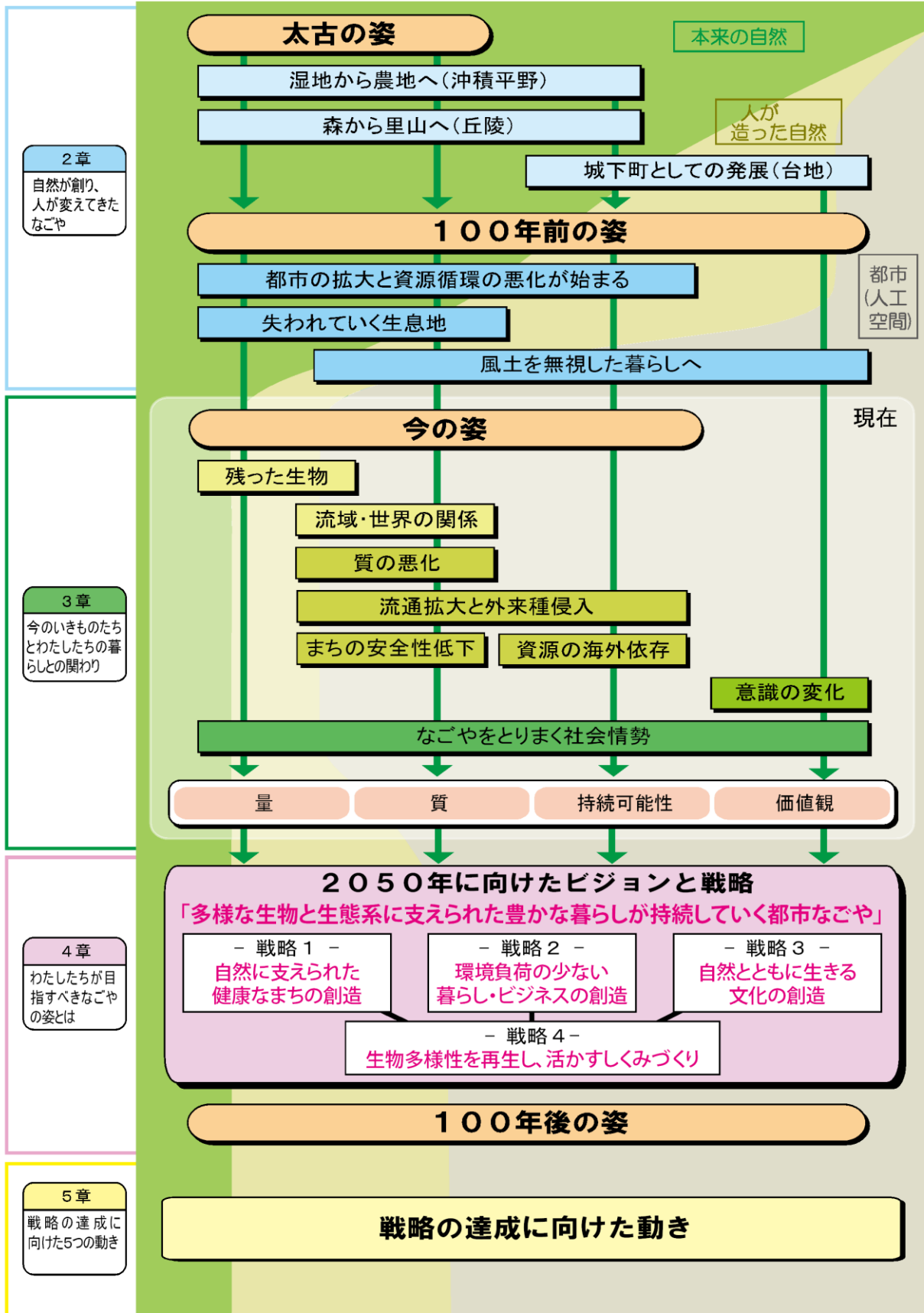


生活スタイルを転換しましょう

- 現在のようにたくさんの“モノ”を消費する生活は、いつまでも続くものではありません。
- 現在の生活を見直し、古来からの知恵や文化を生かして、自分たちの力で暮らしを支えていきましょう。

2. 戦略の全体構成

- ・「生物多様性なごや戦略」の構成は、下の図に示すとおりです。
- ・近代化の過程で失われてきたなごやの生物多様性を、3つの戦略により再生していきます。



※ベースの色分けは「本来の自然」、「人が造った自然」、「都市（人工空間）」の面積的な変化をあらわしています。

・「生物多様なごや戦略」では、なごやの歴史を振り返りながら(2・3章)、実現可能な未来像を描き(4章)、それに向けた具体的な取り組みを示します(5章)。

- ・隆起と浸食と堆積が3つの地形を創った
- ・地形や気候からなごやの環境の基礎が築かれる
- ・3つの地形と水が生きものを育む

- ・総論:3つの地形の特性を活かした人の暮らしの広がり
- ・湿地だった西部は、田んぼや畑として利用された
- ・森だった東部は、雑木林とため池の里山として利用された
- ・台地の上には、城下町が発達して文化が育まれた

2章

自然が創り、
人が変えてきた
なごや

- ・100年前のなごやでは、自然に合わせた人の暮らしが営まれていた

- ・都市区域の拡大と資源循環の崩壊を招く、近代的インフラ整備の始まり
- ・自然の摂理を超えた市街化により、失われていく生息地
- ・資源循環の崩壊が進み、風土を無視した暮らしへ

- ・今も残る生息地には、まだ生きものたちが暮らしている
- ・今の3つの大地で、生きものたちはどうやって暮らしているのか
- ・今も残る生育空間は流域や世界ともつながっている

- ・人に都合のいいまちのつくりは、生きものにとって暮らしにくい
- ・流通網の拡大が、本来そこにいないはずの生きものを運ぶ
- ・世界の生物多様性に影響を与えているわたしたちの暮らし
- ・生物多様性に守られているわたしたちの暮らし

3章

今のいきものたち
とわたしたちの暮らし
との関わり

- ・生きものから感じる心の豊かさを失っていませんか？

- ・21世紀は着実に環境重視の社会にシフトしています
- ・なごやの歴史と現状から、あなたは何を感じましたか？

- ・「環境の世紀」の折り返しにあたる2050年に向けた戦略を立てました

4章

わたしたちが目
指すべきなごや
の姿とは

- ・100年後、なごやはどんな都市になっているでしょうか

- ・健康なまちづくりにつながる動き
- ・暮らしやビジネスの変化につながる動き
- ・新しい担い手や地域づくりにつながる動き
- ・しくみづくりにつながる動き
- ・横断的な取り組みに向けて

5章

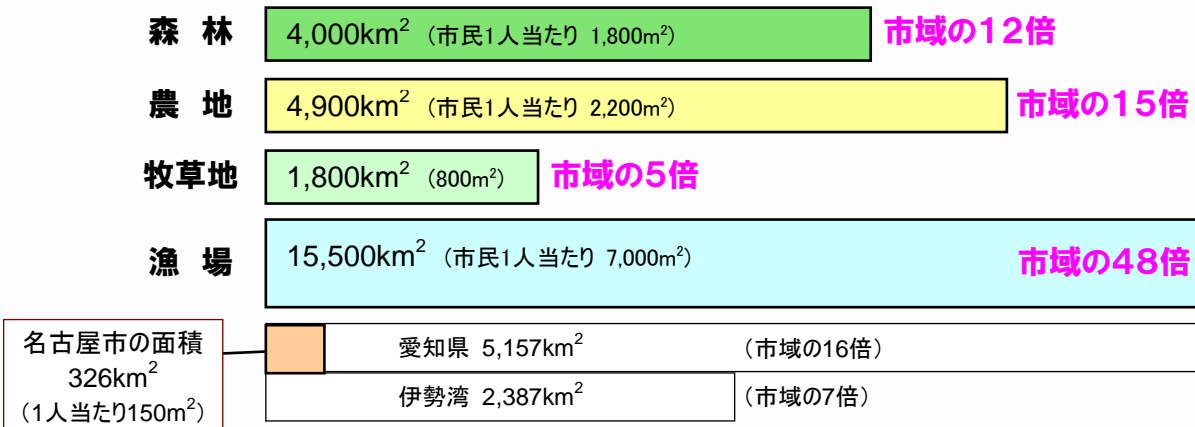
戦略の達成に
向けた5つの動き

いつまでも買えると思うな地球資源

— 世界の生物多様性に影響を与えている私たちの暮らし —

- 現在の名古屋市民の暮らしは、食料やエネルギーなどあらゆる分野で周辺地域での生産や、外国からの輸入に頼っています。
- ここでは、どれほどわたしたちの暮らしが外国に影響を与えているか、みてみましょう。

なごや市民の消費を支えるために必要な土地面積(2005年)

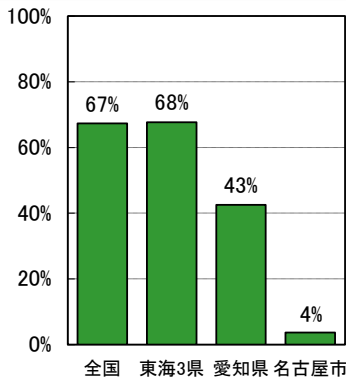


出典：2008年版生きている地球レポート(WWF)のデータをもとに推計

国内の森林の空洞化

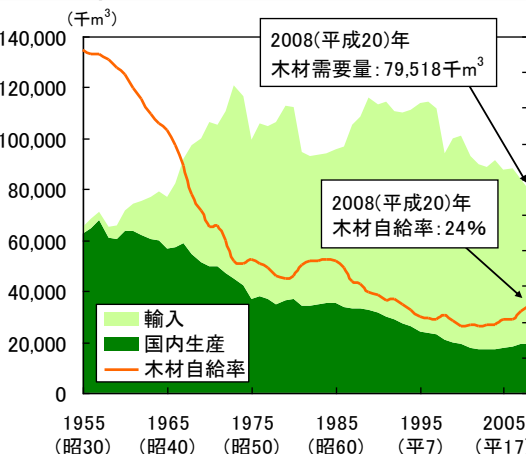
- ・日本は国土の約67%が森林で、先進国で有数の森林大国です。
- ・戦後植林されたスギやヒノキは現在収穫期を迎えています、木材自給率は24%と低く、世界有数の木材輸入国でもあります。
- ・安価な外国材の大量輸入により現地の生態系は荒廃し、国産材の需要低下や林業従事者の高齢化・減少により国内の森林も荒廃しつつあります。
- ・世界の森林保護だけでなく日本の国土保全の面からも、国内の森林を適切に利用・管理することが求められています。

森林率(平成19年度)



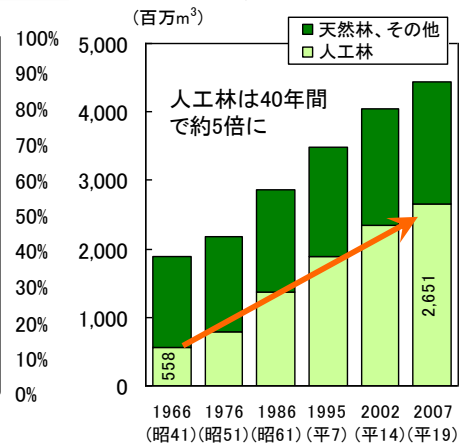
出典：林野庁資料、愛知県資料より作成

木材自給率の推移



出典：林野庁統計情報より作成

日本の森林蓄積量の推移



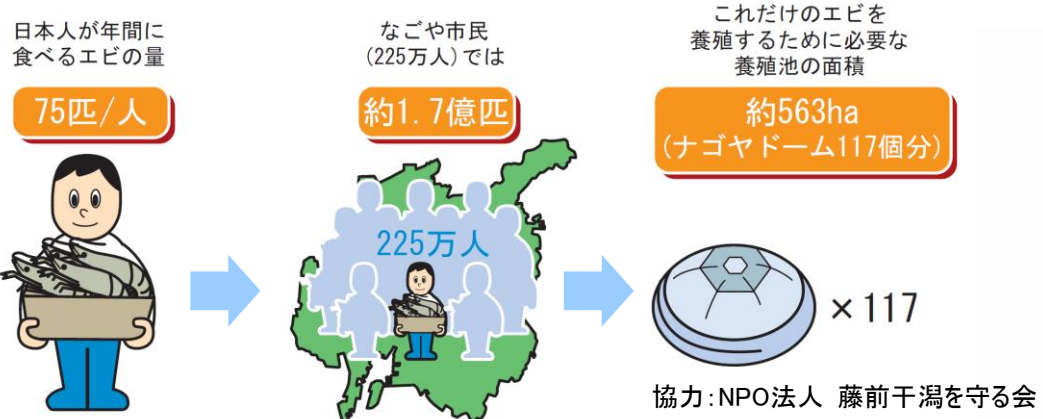
出典：林野庁資料より作成
備考：森林蓄積とは森林を構成する木の体積をいう

(2) 快適な人の暮らしといきもの

食べものと生物多様性

■エビとマングローブ

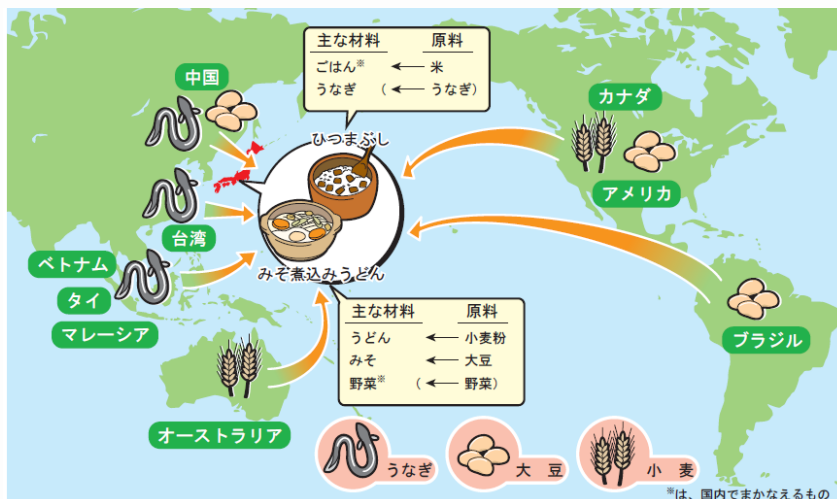
日本で食べるエビの95%は、東南アジアやオーストラリアなどの外国から輸入しています。特に東南アジアでは養殖生産が盛んで、沿岸のマングローブ林を伐採してエビの養殖池が造成されています。なごや市民が食べるエビを生産するために、どのぐらいの面積の養殖池が必要でしょうか？



マングローブ林は80種以上の植物で構成され、魚類やカニ、エビ、貝など様々な生物のすみかです。わたしたちは、年間、ナゴヤドーム117個分のマングローブ林に依存しています。

■なごやめし

「なごやめし」を代表する「ひつまぶし」や「みそ煮込みうどん」も、原料の多くを海外に頼っています。



- 名古屋市民のくらしは、食糧・木材・天然繊維など自然の恵みに支えられています。これらの生物資源を生産するためには、名古屋市の面積の32倍の森林・農地・牧草地と、同じく48倍（伊勢湾の7倍）の漁場が必要です。
- 私たちは、世界の自然に依存しています。日本の自給率は、食糧40%、木材24%です。しかし世界の生物資源の供給は、持続可能とはいえない状況です。

社会情勢の変化のきざし

— 21世紀は着実に環境重視の社会にシフトしています —

- 20世紀後半、環境問題は「公害問題」から「地球環境問題」、そして「持続可能性」に変化しました
- 2050年に向かって、社会はどう変化していくのでしょうか？

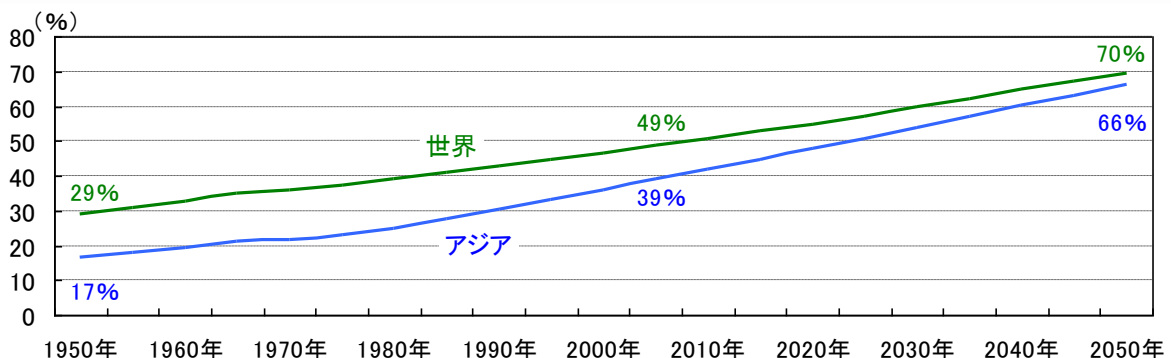
環境問題の変化

	日本	なごや
	高度経済成長期の公害(産業型公害)の激化	
1960年～ 1970年代	<ul style="list-style-type: none"> ・「水俣病、イタイタイ病、四日市ぜんそく」「光化学スモッグ」 ・1970年代には公害対策が進む 	<ul style="list-style-type: none"> 1969年: 市内水質汚濁・大気汚染ピーク 1973年: 地盤沈下ピーク
	「公害」から「環境問題」へ、産業型公害から都市生活型公害へ	
1980年代	<ul style="list-style-type: none"> ・「特定地域の被害」から「広域にわたる動植物・自然へ被害」、さらに「オゾン層の破壊、酸性雨、地球温暖化など」へ ・交通公害、近隣騒音、生活雑排水による河川・湖沼の汚染、生活廃棄物など 	
	環境問題は地球規模のとりのくみへ	
1990年代	<ul style="list-style-type: none"> ・1992年地球サミット開催、アジェンダ21採択 「持続的発展が可能な開発を実現するための各国の行動計画を規定」 ・廃棄物問題、生物多様性の議論進む ・国内では新しい公害「室内空気汚染(ホルマリン、VOCなど)」、「ダイオキシン」 	<ul style="list-style-type: none"> 1999年: 藤前干潟埋め立て断念 ごみ非常事態宣言 市環境基本計画策定
	持続可能な社会へ、環境の新しい世紀の始まり	
2000年代	<ul style="list-style-type: none"> ・リサイクル問題の議論進む ・循環型社会の構築へ 	<ul style="list-style-type: none"> 2001年: 藤前干潟ラムサール条約登録 2005年: 「愛・地球博」開催

世界の都市の発展

- ・現在、世界の陸地面積のわずか2%の都市部に、世界人口の半分以上が生活するとされており、特にアジアの急速な都市化が進んでいます。
- ・今後もこれらの国々では都市化が進み、資源やエネルギーの消費量が増大すると考えられ、日本がこれまでのように世界に依存することは困難になることが予想されます。

世界とアジアの都市化率の推移



出典: 通商白書2008年版(経済産業省)

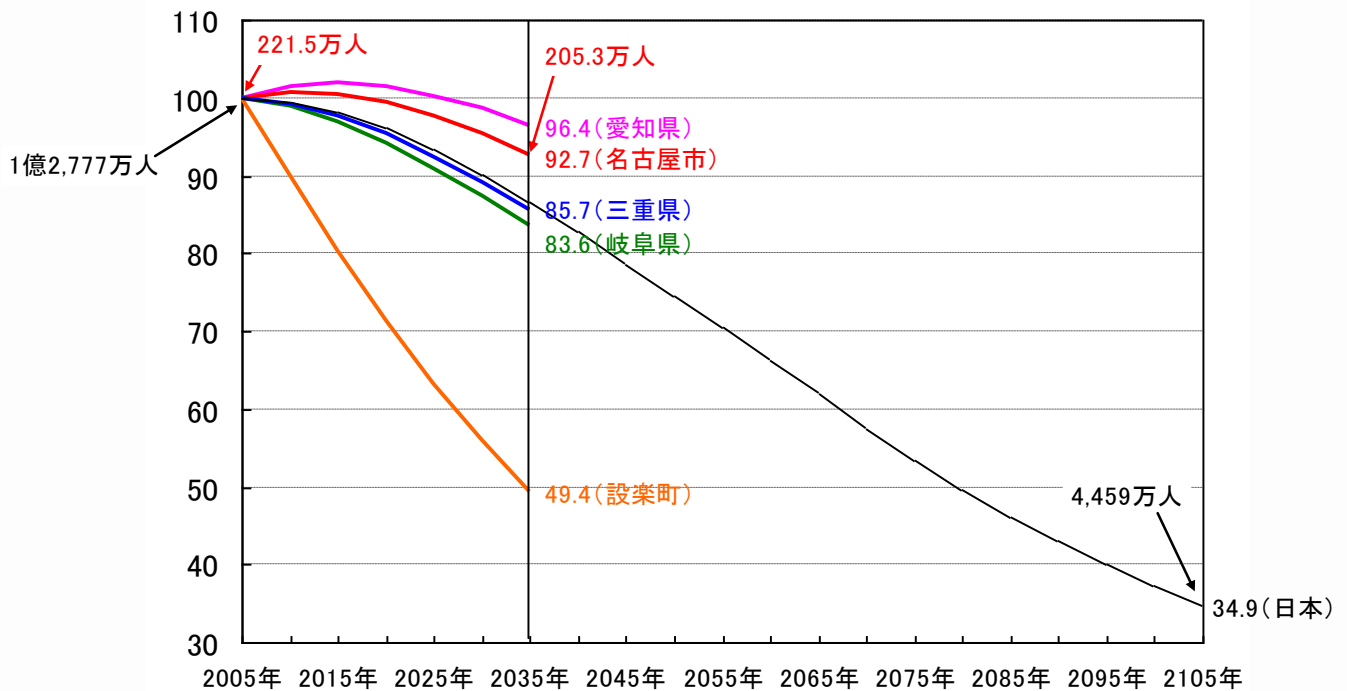
備考: 本図におけるアジアとは、ASEAN+6の16ヶ国を示す

(4) 社会情勢の変化のきざし

日本となごやの将来推計人口

- ・日本国内では、人口は減少すると予想されており、100年後には4,500万人を下回ると推計されています。
- ・その傾向は農村部で特に深刻であると考えられます。
- ・名古屋市でも30年後には約16万人減少すると見込まれています。
- ・人口減少とともに、高齢化も進みます。
- ・農山村が衰退し、食料の生産力だけでなく、水源や自然環境の保全機能の低下が予想されます。

将来推計人口指数(2005年を100としたとき)



出典: 日本の将来推計人口(平成18年12月推計)(国立社会保障・人口問題研究所)

日本の市区町村別将来推計人口(平成20年12月推計(平成20年、国立社会保障・人口問題研究所))

備考: 日本の推計人口は、将来の出生推移・死亡推移ともに「中位」とした場合

- 世界が変化していく中、これまでのように海外に依存して暮らしていくことはできるでしょうか。
- なごや、さらには日本の将来を踏まえて、わたし私たちの暮らしやまちづくりを考えてみましょう。

2050年に向けたビジョンと戦略

—「環境の世紀」の折り返しにあたる2050年に向けた戦略を立てました—

<2050年のビジョン>

**多様な生物と生態系に支えられた
豊かな暮らしが持続していく都市なごや**

<視 点>

- ・気候風土や地形を活かし、自然の摂理に逆らわない
- ・他の地域からの恵みに感謝し、その生態系に配慮する
- ・生きものとの共生を目指し、自然との新しいつきあい方を創造する

<戦 略>

自然に支えられた 健康なまちの創造

- 1 生きもののおすすめ場所の拡大
～土・水・緑をまもり、ふやす～
- 2 自然の質の向上
～風土にあった植生・生物相～
- 3 土・水・緑のネットワークづくり
～緑と緑、緑と水辺をつなぎ、まとめる～

生物多様性を再生し、活かすしくみづくり

- 1 生物多様性を活かす社会システムづくり
- 2 自然共生まちづくりを推進する「情報交流ネットワーク」づくり

環境負荷の少ない 暮らし・ビジネスの創造

- 1 自然を活かした快適な省エネライフ
～生物多様性配慮と気候変動対策の統合～
- 2 賢い商品選択と流域圏の連携
～持続可能な農林漁業を支える流通・消費～
- 3 新たなビジネスモデルの創造
～生物多様性への貢献と活用～

自然とともに生きる 文化の創造

- 1 短期目線から長期目線へ
～「自然の助けを借りる暮らし」への発想転換～
- 2 新しい担い手づくり
～自然とつきあう知恵の共有～
- 3 地域の自然を核にしたコミュニティづくり
～共汗から共感へ～